

APPSA 2023 参加報告

関連基礎科学系 博士課程三年 杉本光衣（石原研究室）

2023年度「博士・修士課程学生のための国際研究集会渡航助成」をいただき、2023年7月21日・22日にベトナム・ハノイにある Vin University にて開催された 10th Biennial Meeting of the Asia-Pacific Philosophy of Science Association (APPSA)に参加した。APPSAはアジア太平洋エリアにおける科学哲学の学会である。2010年に小さな研究グループから始まった本学会は徐々に規模を大きくしており、今回は初めてベトナムでの開催となった。科学哲学分野ではアジア太平洋エリアでの学会は珍しく、西洋哲学に限られない新しい主題が提示されるなど、極めて意義のある会となった。

私は「Patient Involvement in Psychiatry」という題にて発表の機会をいただいた。現在の精神医学においては、専門家（医師・研究者など）が研究を行うことが主流となっている。だが、この方法は当事者や当事者家族などの視点を取り入れておらず、当事者のニーズや経験知を無視している。ときには、研究者のバイアスが反映され、当事者にとって有害な知識が生み出されることすらある。このような問題意識から、精神医学の研究では、当事者参画（Patient Involvement）が徐々に進みつつある。

本発表では、フェミニスト科学哲学（以下、FPS）の理論と問題意識を使用して精神医学研究の当事者参画を分析し、哲学的観点から当事者参画を理解するための枠組みを示した。まず、FPSの初期の研究プロジェクトを援用することで、現在の精神医学の当事者参画にどのような問題点があるのかを整理した。その上で、当事者参画が精神医学研究におけるバイアスを減らすと考えられている点について、FPSのスタンドポイント理論を用いて分析を行った。最終的には、その上でスタンドポイント理論にも個人の認識的能力差を考慮していないという問題があることを論じた。

APPSAはアットホームな雰囲気のある学会で、多くの方が積極的に交流を図ろうとしていたのが印象的であった。特に、会が進むにつれ、各国の参加者が入り混じってコミュニケーションが取られていた。私自身も日本の科学哲学者はもちろんのこと、初めて会った海外の研究者とも話すことができ、多くの卓越した研究者からアドバイスをいただくことができた。

最新の知見に触れ、海外の研究者と交流したことは、私にとってこの上ない経験となりました。最後になりましたが、今回の学会参加に際して、渡航助成をいただいたことを改めて御礼申し上げます。



会場の Vin University